

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成29年 7月25日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 教育学研究科・デザイン学大学院連携プログラム

職 名・学 年 特定講師

氏 名 野 崎 優 樹

助成の種類	平成29年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	第6回国際情動知能会議 6th International Congress on Emotional Intelligence		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他( )		
発表題目	The structure of emotional competence: A Bayesian structural equation modeling approach		
開催場所	ポルト大学(ポルト, ポルトガル)		
渡航期間	平成29年 7月19日 ~ 平成29年 7月24日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	300,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空賃・交通費:	195,550円
		学会参加費:	29,994円
現地滞在費(宿泊費・日当など):		74456円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 私は、ヨーロッパに日本学術振興会海外特別研究員として滞在していましたが、このたび京都大学に就職が決まったため、任期を途中で切り上げて日本に帰国しました。そのため、元々参加する予定でいた今回の学会に参加するための費用をどこかで捻出しなければならなかったのですが、研究費はこれから獲得していく段階にあり、大変困っていました。京都大学教育研究振興財団は、海外渡航の貴重な助成であり、今回、発表助成を受けたおかげで、私が専門とする分野の国際学会に参加することができました。学会では、研究成果をシンポジウムで口頭発表するという大変貴重な経験をすることができ、今後の研究につながるものになりました。採択していただき、本当にありがとうございました。		

## 成果の概要

大学院教育学研究科・デザイン学大学院連携プログラム 特定講師  
野崎 優樹

私はこの度、京都大学教育振興財団の助成金を受け、ポルトガルで開催された6th International Congress on Emotional Intelligenceに参加しました。この学会は、私が専門とする、自他の情動を適切に認識し、調整する能力である「情動知能」に関する学会であり、2年に一度開催されています。今回もヨーロッパをはじめ、世界各国から研究者が参加し、情動知能研究に関するディスカッションが行われました。

今回、私はポルトガルの情動知能の研究者であるLuísa Faria先生に招かれて、「Emotional intelligence: Cross-cultural validation of trait and ability-based instruments」というテーマのシンポジウムで口頭発表をしました。これまで国際学会での口頭発表は2回経験があったのですが、シンポジウムという場での発表は初めてで緊張しました。私の発表は、「The structure of emotional competence: A Bayesian structural equation modeling approach」というタイトルで、日本・スペイン・ベルギー（オランダ語圏）・ベルギー（フランス語圏）の4つの地域で調査を行い、情動知能の構造を検討した結果を報告しました。情動知能と関連する分野の心理学研究では、たとえば、知能研究における「Cattell-Horn-Carrollモデル」、パーソナリティ研究における「Big Fiveモデル」など、その因子構造が明らかにされてきています。心理学研究における複雑な構成概念の検討は、多様な能力や特性をどのように分類することができるのかという軸を提案するとともに、外的指標を少数の構成概念で説明していく上で、重要であると考えられています。しかし、情動が関連する幅広い能力を指し示す概念である「情動知能」については、その因子構造は系統的に検証されてきませんでした。そこで、本研究では、情動知能を構成する能力を網羅的に測定可能な心理尺度であるProfile of Emotional Competenceを用いて、情動知能の因子構造を検討しました。さらに、因子構造を検討する際に、伝統的に用いられてきた手法である「最尤法に基づく確認的因子分析」に加え、その改良版の最新の統計手法である「ベイジアン構造方程式モデリング」を用いた分析を行いました。その結果として、すべての地域において、個人内（自己の情動を対象とする能力）と対人的（他者の情動を対象とする能力）という次元が、情動コンピテンスの高次の因子構造として認められることが示されました。

研究発表後の質疑応答では、心理統計学者から今回用いた統計手法の代替方法に関する提案を受けたり、得られた結果の実践的意義に関する質問を受けたりするなど、有意義なディスカッションを行うことができました。さらに、シンポジウム終了後には、複数の参加者の方から「非常に面白い発表だった」と握手を求められるなどして、成功を収めることができました。また、

Lúisa Faria先生からはランチにも招かれ、学会の運営を担当している先生方や、基調講演者の方々と交流することができました。特に情動知能研究は、欧米で研究が中心に進められていることもあり、日本では、心理学研究があまり行われていないのが現状です。今回の発表を通じて、海外の研究者に対して、日本の研究力の発信に多少なりとも貢献できたのではないかと考えています。

さらに、今回の学会には、基調講演者として、私が日本学術振興会海外特別研究員としてポスドクで海外に滞在していた際に受け入れ教員だったMoira Mikolajczak先生が呼ばれており、久しぶりにお会いすることができました。Moira Mikolajczak先生とは、現在いくつか共同研究を行っており、そのうちこれから日本とベルギーでデータ収集を行う予定の研究について、細かな点を含めて打ち合わせを行うことができました。また、新たな研究計画を私から提案したところ、快く了承していただき、これからの研究の進め方についてもディスカッションを行うことができました。やはり、対面でのミーティングは非常に捗り、これからの私の研究にとって、とても有意義な時間を過ごすことができました。

その他にも、学会中は様々な基調講演やセッションに参加しました。当然のことながら、どの発表も私の研究テーマである「情動知能」に関するものであり、自分の研究の参考になる新たな発見が数多くありました。中でも特に、情動知能を高めるトレーニングについて、実証的検討を行った研究が数多く見られ、多くの事例が非常に参考になりました。将来、日本で実践する機会があれば、ぜひ活かしていきたいものばかりでした。

今回、この6th International Congress on Emotional Intelligenceに参加させていただき、現在世界で最先端の研究を行っている数多くの研究者の話を聞いたことに加え、ワークショップやポスター発表において、会いたいと思っていた研究者の方々と直接お話しするというかけがえのない経験をすることができました。学会参加・発表を通して、多くの刺激を受けるとともに、研究へのモチベーション向上や、新たな研究アイデアの創出がありました。この学会で得られた成果を日本に持ち帰り、今後の研究につなげていきたいと思えます。

最後になりましたが、本会議への参加助成をしていただきました、京都大学教育研究振興財団に心より御礼申し上げます。